

書評：波平恒男『近代東アジア史のなかの琉球併合 — 中華世界秩序から植民地帝国日本へ』 — 比較から東アジア史を見直す—

権 赫泰

近年、韓国で沖縄への関心が高まっている。もちろん、観光地としての「人気」が先走っている感はぬぐえないが、他方、研究も過去に比して活発に行われている。また、伊波普猷をはじめ、新崎盛暉、川満信一、目取真俊などの作品が次々と翻訳・紹介されている。日本帝国主義による支配という共通の歴史体験に加え、米軍基地を抱えている現在の共通の「苦悩」が沖縄への高い関心の背景を支えているとみるべきであろう。とくに辺野古への基地移転問題と済州のカンジョン（江汀）基地問題との類似性や連動性に着目し、反基地運動の「連帯」を主張する声も高まり、沖縄と済州の交流は次第に頻繁になっている。このようにみれば、韓国の沖縄への関心は、一方では脱政治的で開発主義的な沖縄の「消費」であり、他方では米軍基地を媒介した韓国と沖縄の連動という条件の下で韓国社会が沖縄へ送る平和連帯のまなざしである。ノーマ・フィールドが『天皇の逝く国で』（ハングル版）で「アメリカの米軍基地と日本のリゾート」を「二つの旗のもとに各々結集される勢力の具体的な実現体」と述べているが、韓国の沖縄への高い関心も例外ではないのである。しかし、考えてみれば、韓国社会がこれほど沖縄に関心を持ったときがあったのだろうか。逆に言えば、多くの共通性を抱えているにもかかわらず、これまで韓国と沖縄はなぜ互いに関心を示しあうことができなかったのだろうか。波平恒男の膨大な著書を読みながら、思い浮かべざるをえなかった問いはこれである。

中野重治は1965年に朝鮮人のことを「いちばん近い外国、外国人、半島人、朝鮮の人、第三国人などと私は一度も呼ばない」としたうえで、「多分朝鮮を外国とみない見方、朝鮮人を外国人とみない見方——それは、直接には時間的にも日本政府によって日本人自身に叩きこまれるなりじわじわ染みこませるなりしたものだったろうが——これが、1965年の今もまだ私たちに残っている事実がこれ

から問題の一つではないかとわたくしは思う。いちばん近い隣りの外国、いちばん近い隣りの外国人、この感覚に熟することが何かまずいことを引き出すだろうか。私はそうは思わない」（中野重治「いちばん近い外国・外国人」『太陽』1965年12月）と述べている。ここで朝鮮関連の文章を多く残してきた中野重治は朝鮮（人）を独立した主体として認めない日本社会の根深い朝鮮人差別を問題にするため、朝鮮に安易に「近い隣り」類の「断り書き」をつけて形容する日本の現実を皮肉っているようだ。しかし、中野の本意はともかくとして、朝鮮を断り書きなしのただの「外国」と「格上げ」することが、朝鮮（人）を「主体」と認めることに結びつくだろうか。むしろ、巷で言われている朝鮮＝「外国」という等式が、逆に日本と朝鮮との間に交錯している、ねばねばしい生きている歴史を「封印」することになりはしないだろうか。

谷川雁も、この点を意識してか、中野重治の上の文章を引用したうえで、次のように記している。「権力の相互関係として上の方へ、居住形態の量的な遠近関係として外の方へおしだしてしまえば、私などの朝鮮問題はひとかけらもなくなってしまうのである。朝鮮を外国、朝鮮人を隣人としてすませるくらいなら、私にとって日本はタンガニーカより遥かに遠い国だ」（谷川雁「朝鮮よ、九州の共犯者よ」岩崎稔・米谷匡史編『谷川雁セレクションII』日本経済評論社、2009年）。谷川は主体と対象との間に介在している複雑な連累のことを問題にしているように思われる。意図はともかくとして、私は二人のやり取りから波平の方法論につながる一つの糸口を見出すことができる。すなわち、韓国と沖縄を「比較」することが持つ意味の問題である。

一般的に相異なる複数の地域を一つの視座で分析する際に用いられる比較史・比較論は、かならずしも共通の歴史的経験や相互規定を前提にするとは限らない。「進んでいる」ところと「遅れてい

る」ところが時間的な誤差をおいて同様の発展経路を辿っていくという単線史観に基づいている場合が多い。ここで用いられる比較史・比較論は、文化相対論に立たない限りでは、「遅れている」ところが「進んでいる」ところに追いつくことを目標に据え、「遅れている」ところの「後進性」の析出やその克服と改造を問題意識にする場合が多い。したがって、このような比較論は両社会が歴史的に互いにどう影響しあってきたのかは問題にしない。

本書は、二つの問題意識を考察している。「琉球処分」の歴史を、ひとつは、下から、すなわち併合される側から、もう一つは、東アジア史の脈絡から、すなわち朝鮮の歴史との対比で見えていくということである。これは、日本史からの脱却であると同時に、日本帝国主義の侵略史を、支配する側でなく、支配される側から見ていくという意味で、歴史記述において内在的かつ主体的な視点の重要性を同時に提起しているように思われる。

また、波平の著書の特徴は比較にある。上で述べたような単線史観に基づいた単純な比較でないことはいうまでもない。おもに琉球を中心に据え、日本・朝鮮・中国が琉球とどう「連動」(connection)しあっていたのかを問題にするという意味での比較である。この比較は、これまで歴史と歴史解釈を先導してきた支配する側からの脱却を目指す下から再構成される地域的時空間としての東アジアである。波平の比較という方法は、単線史観に基づいた単純な比較と異なる、一種の「連動」に近い概念である。「連動」は「交錯」(complicated involvement)と「連累」(implication)を包括する概念であり、たとえば、AとBを比較する際に両者の共通性と差異に注目するだけでなく、両者が互いにどう影響しあうのかという相互規定性を重視する。すなわち、琉球と朝鮮には、中華世界秩序のなかでも、日本帝国主義の支配という面でも、共通性と差異が存在しているのであり、これは比較という方法を持ち出すことによってはじめて明らかになるのである。

しかし、本書は共通性と差異を見出すための比較にとどまらない。すなわち「連動」を意識した比較・対比が随所で展開されている。波平は比嘉春湖が1910年の「韓国併合」直後に「琉球は長男、

台湾は次男、朝鮮は三男」(347頁)と記した文章を引用しつつ、琉球と朝鮮の被支配の歴史から時間差をおいて繰り広げられた「併合」、「差別」、「同化」、「皇民化」の被支配の共通歴史、すなわち「前近代の東アジア国際秩序という歴史的与件の上に、両者とも近代になって日本の天皇制国家に併合されるという共通体験」(11頁)にもかかわらず、これまでの研究においてこの共通体験を意識した琉球研究はほとんど見られなかったと指摘している。

「琉球併合」が中国や朝鮮問題との絡み、すなわち東アジアの脈絡で行われ、1910年の「韓国併合」に繋がっていったにもかかわらず、研究においては朝鮮問題との比較を念頭においた研究がほとんど見られなかったと指摘しているのである。一国史に閉じ込められていた研究の孤立分散性の問題である。

したがって東アジア史の脈絡で「琉球併合」を位置付けようとする波平の問題意識は、それぞれの歴史を個別のかつ分散的に理解してきた東アジアのそれぞれの地域の歴史学に対する痛烈な批判の意味もあわせ持っている。波平は比較を同時間帯の異空間で発生した出来事との対比のみに使っているわけではない。前近代から近代にいたるまでの国際秩序の変容を「断絶」でなく「連続」の事柄として捉えているからである。おもに日本の歴史学が日本の侵略史をもっぱら国際秩序の新たな再編過程で生み出された近代以降の出来事としてのみ捉えていることに対する批判の性格を持つとも言えよう。

波平のいう東アジアという地域的時空間は、所与の文化決定論的な概念でも、また未来の「あるべき当為」としての抽象概念でもない。居住者の日常に影響を及ぼしている、実態に基づいている地域的時空間である。われわれは、波平の著書から、一国レベルでなく、相互に連動しあう東アジアという地域単位で、支配する側が「独占」してきた歴史を支配される側がどうやって「奪い返す」のかという問題につながる大きな含意を得ることができる。この含意は当然戦後の歴史記述に当てはまる。